

資料紹介

●地域研究の矛盾を生きる

尾崎三雄『日本人が見た'30年代のアフガン』
石風社 2003年 311ページ

本書は通常の意味でのアフガニスタンに関する事情紹介や調査研究の書物とはまったく内容を異にしている。まず第1に、ここに収められた文章は、公刊を前提にして書かれたものではない。第2に、著者は18年前に83歳で亡くなっており、ここに収められた写真と文章は本来なら(9・11米国同時多発テロがなければ)世に出るきっかけを見い出せないままご遺族に保管されていつか忘却され、ひっそりと朽ち果てるはずのものであった。

このような背景をもつ本書は、1930年代のアフガニスタン、著者である故尾崎三雄の経歴と時代的背景、さらに日本とアフガニスタンの関係史について、及ぶ限り想像を働かせながら読むべき書であり、また読者はそうして読み進むうち、本書の酌めど尽きせぬ謎と魅力に圧倒されるに違いない。

著者は当時の農商務省に入り、1935年にアフガニスタンに招聘された農業技師ということになっている。だが第二次大戦開戦前夜の時代背景からして、彼の任務は単に農業技術の指導を行なうということではなかった。そこには当時英露の角逐下にあった内陸アジアの一国に日本国の橋頭堡を築くための情報収集という目的が含まれていた。しかしこうしてアフガニスタンに夫婦で赴いた著者の現地での3年間の調査活動(少なくともその主要な部分)は、アフガニスタンという国の文化百般を現地語を介しかつ現地調査を通じて総体として理解しようという、現在の言葉でいえば「地域研究」そのものと言ってもいい方向性をもっていたのである。

それだけにここに収められた文章は、国家的な要請と研究者の学問的意思という地域研究に常にまつわる現代的な問題を先駆的に内包している。事実敗戦後は著者は故郷の山口に半ば隠棲し、アフガニスタンについてついに一度も公的に発言することなく

世を去った。

本書は最初に112ページに及ぶ著者撮影の写真が掲載され、続く本文は妻鈴子さん筆の家族への私信を導入として著者自身の筆になる「ジャララバッド紀行」「カンダハル紀行」「カシミール遊記」が配されている。圧巻は計4回の調査行の記録である「紀行」の部分であり、著者は後に1970年代に大統領の座に就いたダーウード・ハーンと会見しているばかりでなく地方の視察にも同行していることが知られる。

本書は単に1930年代のアフガニスタン社会の記録であるだけでなく、日本人による最初のアフガニスタン地域研究でありアフガニスタン文化論である。さらに地域研究的な方法そのものについての省察を促すという意味では、広くアジア諸国の地域研究者にとって興味深い内容を含んでいるといえるだろう。

なお本書に興味をもたれた方には、福元満治『伏流の思考：私のアフガン・ノート』(石風社 2004年187ページ)を併読されることを強く薦めたい。同書は石風社代表であり同時にベシヤワール会広報担当でもある著者がアフガニスタンとの関わりについて語った文章を集めたものである。

(鈴木 均)

●イラン・イスラム革命のルーツ増補版

Nikki R. Keddie, *Modern Iran : Roots and Results of Revolution*, New Haven and London: Yale University Press, 2003, xvi + 379pp.

1981年に刊行された著者の *Roots of Revolution : An Interpretive History of Modern Iran* の増補版とも言えるものである。12章から構成されており、そのうち最後の3章が旧著に新たに付け加えられた部分である。

著者は「まえがき」の部分で、本書を増補して出

版することになったいきさつや、旧著での見解に若干の修正が生まれた部分についての短いコメントを載せている。またより興味深く印象的なのは、著者の以下のようなつぶやきである。「……2003年の米国で執筆しながら、私は、パフラヴィー時代もしくはそれ後のイランにおけるきわだつ特徴として本書が言及したものの多くは、現在の米国においてもまた私が1981年版を書いた頃よりずっと顕著になっているという事実」に驚愕する。深刻化する所得配分の格差、富強者の優遇と貧者の切り捨て、国の過去と未来に関する慢心、国内・外交政策における『美德』やそれらが『神による導き』をうけているという慢心、イデオロギーに突き進む政府指導者、市民的自由への攻撃、財界と政府を巻き込んだ大規模な汚職などだ。これらのうちのいくつかは今日のイランよりも米国において甚だしい……」。著者は、イラン反体制派は政権の変革を望みながらも米国の干渉を拒絶している、と結び、大きな危惧を抱きながら、米国政府の対イラン外交の進展に並々ならぬ関心を寄せていることを伝えている。

増補部分の構成は、第10章「ホメイニー期の政治・経済学：1979～89年」、第11章「ポスト・ホメイニー期イランにおける政治・経済学」、第12章「社会、ジェンダー、文化そして知識人の生活」となっている。第10章と第11章は、主として政治変動のプロセスを軸に、その当時採用された社会・経済政策の影響などを織り交ぜつつ、対象期間を概観するものである。前半に当たるホメイニー期は、革命政権樹立からホメイニー師の死去までを指し、後半に当たるポスト・ホメイニー期はその後から2003年までの時期（著者はこれをさらに「ラフサンジャーニー時代」と「ハータミー時代」とに分けて論じている）を扱っている。第12章は、革命後のイラン社会で観察されたさまざまな社会的・文化的変化について論じており、「女性と家族」「芸術：とりわけ映画」「マイノリティ」など読者の関心を惹きそうないくつかのトピックを取り扱っている。

（岩崎葉子）

●中東社会の家族と消費生活

Relli Shechter ed., *Transitions in Domestic Consumption and Family Life in the Modern Middle East : Houses in Motion*, New York : Palgrave Macmillan, 2003, xiv+215pp.

本書は2001年にイスラエルのベン・グリオン大学で開催されたワークショップの報告集である。その問題意識は、家族を外部から孤絶した自律的な「私的領域」としてとらえるのではなく、より大きな経済・政治・文化的環境と密接に結びついた領域としてとらえる点にある。そしてそのような連関の接点として、家族の消費生活に焦点があてられる。その場合、途上国社会の消費について語る際にしばしば持ち出されるグローバリゼーション言説——「マクドナルド化」に代表されるような、一方的で均質化を求める変化の波による消費生活の侵食——は退けられ、ローカルな消費者たちの抵抗やエージェンシーが家族（世帯）の消費パターンやその意味が決定される上で果たす役割が注目される。

家族の変容をその外部との関係においてとらえる視点はそれ自体新奇ではない。だが、国家と市場という「大きな環境」と家族を結ぶ接点として消費生活に注目する点で、本書の試みは斬新といえよう。

本書は3部構成をとる。第1部（第1章、第2章）「国家、民族運動と近代的な家庭」では、近代エジプト国家の成立が新たな家内性の形成に及ぼした影響、第2部（第3章、第4章）「家内領域の表象」では、後期オスマン帝国と建国期のイスラエルにおいて写真や雑誌といったメディアがローカルな価値観を含んだ新たな家内性の形成に果たした役割が分析される。第3部（第5章、第6章、第7章）「市場・消費・不平等」では現代のトルコの住宅・耐久消費財市場の性格と公共政策の関係がK・ボランニーの議論を援用して分析され、またイスラエルにおけるパレスチナ人の家族生活と政治経済環境の関係が人類学的手法によって、消費生活に見る社会集団間格

差が統計学的手法によってそれぞれ検討される。

(村上 薫)

●シリアの有識者による改革運動の盛衰

Alan George, *Syria : Neither Bread nor Freedom*,
London and New York : Zed Books, 2003, 206 pp.

30年近くにわたって「絶対的指導者」としてシリアを統治しつづけたハーフィズ・アサド前大統領の死(2000年6月10日)は、同国内に変化の機運を高揚させた。前大統領の後継者としてシリアの新指導者となった二男バッシャール・アサドは、大統領就任とともに「上からの改革」に着手する一方、前政権下で沈黙を余儀なくされてきた国内の有識者や人権活動家もまた、「市民社会」や「民主主義」の実現を主唱し、「下からの改革」をめざすようになった。

本書は、こうした新たな動き——「1963年のクーデター〔いわゆる「バアス革命」〕以降の約40年間で もっとも活気に満ちた政治的展開」(p.x)——に着目し、「ダマスカスの春」と称される有識者の改革運動の盛衰を真正面から取り上げた初の単行本である。

同書において最も注目すべきは、ミシェル・キールー(作家)やリヤード・サイフ(前人民議会議員、シリア・アディダス前代表)といった有識者・活動家とのインタビュー内容を紹介し、アサド政権に対する改革要求運動の実体と、弾圧に至る経緯をこと細かに描き出そうとした点であろう。しかしながら、シリアにおける政治・社会・経済改革をめぐる一連の動きを、権威主義・独裁体制(現体制)対市民社会・民主主義の擁護者(有識者)という単純な構図

のなかに閉じこめ、有識者を英雄扱いする論調は、今日のシリアが抱える根本的問題を見逃す危険性をはらんでいる。すなわち、現在シリアで展開しているさまざまな政治運動・社会運動は——アサド政権が主導する「上からの改革」であれ、同政権の外部に位置する有識者による「下からの改革」であれ——、民衆の日々の生活や意識とまったく乖離したかたちで展開しており、改革運動がこうした政治的な「エリート主義」を克服し、民衆の実生活と有機的に連動しないかぎりにおいて、それは「机上の空論」の域を脱することはないのである。

過去半世紀にわたる権威主義・独裁体制という現実のなかで「慣習化」してしまった民衆不在の政治に疑義を呈することこそが、今日のシリアにおいて求められており、そうした立場こそが、同国の停滞や後進性を打開するカギとなるだろう。

なお、本書の構成は以下のとおり。

序 文

- 第1章 「ある種の不幸の平等」——シリア概観
- 第2章 「ダマスカスの春」——市民社会運動の高揚
- 第3章 「ダマスカスの冬」——市民社会運動の弾圧
- 第4章 「国家と社会を指導する党」——バアス党
- 第5章 「自由の灯り」——議会
- 第6章 「権威でなく法の支配」——司法制度
- 第7章 「バランス、客観性、倫理」——メディア
- 第8章 「社会主義的、民族主義的世代の創出」——教育
- 第9章 「われらが指導者……永遠たれ？」——シリアは何処へ？

付 録

参考文献一覧

索 引

(青山弘之)